

05年01月30日 ■北朝鮮、調査会を「反共和国謀略団体」と非難

北朝鮮の国営朝鮮中央通信は1月31日、下の論評を報道しました。

この論評は16日の2人の写真発表について非難したのですが、中にも出てくる石川千佳子さんのことについては事件が報道されてから数カ月して昨年暮れに論評していました。反応が鈍いのでかえって気になっていたのですが、今回は期待通り(?)のタイミングで出てきました。

調査会を「反共和国謀略団体として悪名をとどろかせている」とまで評価してくれるのは光栄の至りで、少なくとも朝鮮中央通信に褒められるよりははるかにましです。近い将来北朝鮮に乗り込む時は、この論評を持って行って「金正日政権から反共和国謀略団体と言われた」と言えば北朝鮮の人々からは大歓迎してもらえそうです。

ところで、この文章を呼んで頭に浮かんだのは、かつて柏崎の少女監禁事件が明らかになったときの鬼の首でもとったような北朝鮮の論評です。北朝鮮はこれをとらえて「ほらみろ、拉致など日本のでっちあげだ」と大騒ぎしました。

寺越武志さんの著書ということになっている北朝鮮で出版された本、『人情の海』には次のように書かれています。

一九九〇年一月には新潟県三条市で小学校に通っていた九歳の少女（訳注・原文では氏名が記されている）が失踪した。日本の警察は一〇年近くこの失踪事件の真相を明らかにできなかった。

後にわかったところによると、少女は校庭で野球を観ていたところ、正体不明の男に拉致された。そして同じ県内の柏崎にある拉致犯の家に連れて行かれ、外に出ることもできずに監禁されていた。

九歳の少女が一九歳の女性になってはじめて失踪事件の内容が明らかになった。

この事実をはじめとして拉致犯を逮捕できない多くの拉致事件をもってして、日本の警察が無能で職務怠慢だという社会的非難が強烈に巻き起こったのも当然だ。

ところで不思議なことは警察が拉致犯を捕まえられず、迷宮入りする度、日本当局者と極右保守勢力がその責任を転嫁し濡れ衣を着せて、「北朝鮮の拉致疑惑」説を持ち出すことである。

彼らは一九七八年に失踪した田口八重子事件、一九七七年に新潟県で一三歳の横田めぐみが失踪した事件など七件一〇名の日本人が「北朝鮮に拉致」されたといつて、これは何者かによる拉致の「冰山」の一角であると大騒ぎしている。

本当に稚拙で愚かな断定と常識以下の詭弁に驚くばかりだ。

このようなごり押しをどうしてするのか、合理化し既定事実として納得させようとする日本の一部のマスコミと売文家たちの必死の努力は例えようもなく哀れだ。

彼らが「北朝鮮の日本人拉致」を扱った文を見ると、例外なく科学的で客観的な資料を提示できておらず、憶測と判断ミスで一貫している。これらの文は「した可能性がある」とか、「…と見られる」とか、「…だと考えられる」といったあいまいさと誰某から「聞いたところによると」といった無責任さが特徴である。さらに彼らは「聞いた話は伝わる過程で誇張されたり脚色されることも少なくない」と言い、好き放題いい加減に書いた文で逃げ道を予め用意してある。

これは北朝鮮で出版された本です。したがって、寺越武志さんは自らの意志でこの本を書いたのではありません。完全に北朝鮮当局のプロパガンダなのですが、このときは9・17の前なので田口八重子さんや横田めぐみさんの事件もでっち上げといっています。そのことを理解して読むと、今回の論評の意味が良く分かります。

ところで、論評では最後に「日本は今回の謀略劇の真相を正確に解明し、責任者らを直ちに処罰すべきである」とありますが、どうせなら「私たちの手で処罰する」というべきではないでしょうか。「わが方にとってはとくに驚くことでも新しいことでもない」というのも、北朝鮮が気にしていることの証拠で、こんなところにも、北朝鮮の最近の弱気が現れているような気がします。

●正体が暴かれた日本の『精密検査』説

(2005年1月31日付朝鮮中央通信論評 ラジオプレス訳から一部修正して転載)

最近、日本が考案したもう一つの反共和国謀略劇の真相が暴かれ、人々を驚愕させている。

さる17日、日本のマスコミは「脱北者」とされる人々から入手した写真数枚を「精密検査」した結果、写真に写っている2人の男女が数十年前に行方不明になった斉藤裕と松本

京子だという事実が新たに「判明」したと一斉に報道した。

この時を逃すまいと日本の内閣官房長官・細田は直ちに記者会見を開いて、「強力な新しい証拠が出た」「北朝鮮側に新たな人物に関する資料の提供を求める」「被害者はまだいる」などとわめき立てた。

ところが2日後、南朝鮮でその写真の中の男女の主人公が現れて「私たちは南朝鮮に住んでいる『脱北者』であり、日本人拉致被害者ではない」と反論し、自分らの写真を公開して広めた団体とマスコミに公式謝罪を求める声明文を発表する事態が繰り返された。

結局、事件を主導した日本の「特定失踪者問題調査会」の代表なる者と誤報を流した日本のマスコミが「謝罪する」「謝罪談話を発表する」として、人々の前で、たつぷりと恥をかく格好となった。

「特定失踪者問題調査会」といえば、反共和国謀略団体として悪名をとどろかせているのに加えて、今回のような悲喜劇を演出して内外の嘲笑と非難の対象となったことが一度や二度ではないため、わが方にとってはとくに驚くことでも新しいことでもない。

昨年、わが方による「拉致被害者」とされていた石川千佳子という女性教員と一緒に働いていた日本人男性によって学校内で殺害されていたということが26年ぶりに明らかになって人々を驚かせた事件もこの団体と関係がある。また、才田善一と言う男性が現在、東京に住んでいることが確認されたのをはじめ、この団体が同じ「部類」で扱ってきた行方不明者らの身元が日本国内で明らかになり、人々の笑い種となったことも多い。

今回、「入手写真」の主人公がマスコミに対して「提供された写真の中には多くの偽物が混ざっているが、そのうちの一枚は私の義理の姉だった」と明らかにしたところだけを見ても、この団体が「入手」して「精密鑑定」したとする資料や、「分類」したとする「北朝鮮拉致被害者」のリストがいかにも荒唐無稽なものであるかを知ることができる。

このような団体は、決心さえすれば今後も住所や名前、身元を全く確認できない「脱北者」の名札をつけたり、先端科学技術を悪用したりするなど、手段と方法を選ばずあらゆる詐欺劇をでっち上げるだろうという人々の予測は決してはずれない。

問題は、このような謀略団体の虚偽捏造資料を持ち出して、日本の国家政策を代弁する内閣官房長官なる者が「精密検査」とか「強力な新しい証拠」などと断言して、わが方に公然と食ってかかったことである。

これは、日本政府が現在、わが方を狙った極右勢力の反共和国謀略戦に深く加担して積極的に共謀しているという明白な証拠である。

今回の「入手写真」謀略の件を通じて、日本は「拉致問題」に関して自分らがわめいている「精密検査」の結果なるものの法的価値と信頼度を自ら失墜させた。

日本が1カ月前に「国内最高水準の研究機関による客観的かつ正確な検査結果」として発表した横田めぐみの遺骨「鑑定結果」なるものもいかなるものであるかがあらためて明らかになった。

国内の拉致犯罪を取り扱う上では難しくもない数枚の写真の分析について「鑑定作業における困難を再認識した」「謝罪する」などと弁明する日本が横田の夫から直接受け取った遺骨に限って、いまだに「精密検査」説を主張する理由は一つしかない。

それは、「国民感情」の美名の下に拉致問題を自らの罪悪に満ちた過去の清算を回避するための盾、権力争奪と金もうけの手段、米国に追従した反共和国孤立・圧殺策動の道具としてりようしようという卑劣で不純な目的に根源を置いている。

拉致犯罪は歴代日本特有の遺伝的気質であり、今日もこの社会をむしばむ体質的病弊となっている。

日本は戦時、わが人民とアジア人民に対してはたらいた特大型拉致犯罪について精算していない唯一の戦犯国家であり、戦後60年解明できなかった多くの国内拉致事件を抱えて今日も頭を痛めている国である。

このような日本が誰その「拉致問題」を云々し続けるのは無駄な行為である。

日本は「超大国」の機嫌をとるための反共和国謀略策動に狂奔するよりも、過去の清算をはじめ、国際社会の信頼を得るために専念することが自国内の人民と「国益」のための正しい選択であることを悟らなければならない。

差し当たって日本は今回の謀略劇の真相を正確に解明し、責任者らを直ちに処罰すべきである。
